『岡山商大論叢』（岡山商科大学）
第56巻第２号　2020年12月
Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY
Vol.56　No. 2　December 2020

《論　　説》

しなやかな合理性から認知主義へ

九　鬼　一　人

From Flexible Rationality to Cognitivism

KUKI Kazuto

リッカートは、客観主義と主観主義、それより派生する諸二元論の対立が、価値観点の欠如のため、アポリアを抱えていることを批判しつつ、――客観主義が現実性を、主観主義が価値を主題とするとして、――文脈を整理することで総体的な人間観を呈示しようとした。本論文では、しなやかな合理性と銘打つべき、そのトータルな価値哲学の一端を瞥見する。その見取り図は、以下のとおりである（九鬼 2019.）。

硬直した合理性の限界・・・・・決断性・可謬性・非完結

しなやかな合理性の射程・・・・実践性・反省性・多元性

リッカート哲学は、世界観望が拠って立つ価値の体系化をつうじ、理論理性の限界である決断性に対して、実践性の〔認知主義と折り合うかたちの〕止揚を、――妥当の限界である可謬性に対して、反省的な修正の余地を、――価値体系の非完結に対して、個性主義的な多元性を打ち出している。ここではなかでも、〔第一の〕実践的視角に開かれた、その非自然主

義的**認知主義**を称揚したい。もとより自然主義をとる認知主義があることは承知しているが、とくに自然主義的非認知主義〔の情動論〕として J. J. Prinz の身体性評価説を対照項に置く。論述は思想史的な研究を主眼とするが、ときにトピックに即して、「思想史からの飛翔」も厭わないことにする。

〔なお主意主義の記述は、旧稿「リッカートの義務論的認識論—誠実性と自己決定の狭間から見えてくるもの—」(表現は大幅に改訂した)、認知主義の記述は、今年、脱稿した「真理の宛て先—新カント学派とスピノザ」に一部依拠していることを申し添えておく。これまで構成主義に与っていた立場を修正し、認知主義的客観主義に舵をとって、新しいリッカート解釈を打ち出す。〕

(1) 態度決定の祖型とその限界

まずリッカートにおける〈ノエシス＝ノエマの対向の祖型〉を素描する。

西南ドイツ学派の認識論は、社会的〈実践〉に焦点を結ぶゆえ、しばしばフィヒテ主義と呼ばれる[1]。とくにその是認／拒斥の感情〔の着想〕については、フィヒテの道徳論をお手本にしている。例えばフィヒテにおいては、義務に即して是認／拒斥が語られる（J. G. Fichte 1977（←1798-1799), GAI/5. S. 155. これら感情的適合は二元対立性を示す。Ibid., S. 137.)。それゆえ言われる、西南ドイツ学派なかんずくリッカートの認識論は、フィヒテ的基幹構図を下絵にしている、と。例えば彼の、当時の心理学につうじる「明証感情」は、『判断力批判』の影響下、フィヒテにしたがう情緒的契機と考えられる（Vgl. M. Heinz 1995, S.109-129.)。その道徳主義を受け継いで、西南ドイツ学派は以下に述べるがごとく、価値判断〔= Beurteilen〕を重視し、理性の〔実践的〕自律を説く。「〔意志が要求するところの〕このように、みずからに命じる意志は、自律的と解される」

1　H. Rickert 2018, Bast版全集Bd.2/1, S.335. 及びAnm.273. を見よ。

(H. Rickert 1921, S. 128-129.)。すなわち認識を一種の「態度＝振る舞い」[= Verhalten] というわざに引き戻す。がしかし人倫を意志に委ねたリッカートには、判断の決断性という弱みがつきまとう。というのも真理が成り立つ以前に、人倫によって認識の根底は先取りされているからである。もしそうなら、悪しき決断主義に巻き込まれないだろうか。

リッカート判断論は、次の実践的構図をとる。例えば判断遂行の点で「AはBである」という判断は、「AはBであるか」という問いに答えを与えることである。ここでAとBの表象結合態は、機能的には問いに模すことができるから、判断「AはBである」とは問いなき是認（「AはBでない」なら問いなき拒斥）という、決断主義の亜種に陥りかねない。適合の向きを主観から客観へとしてしまうからである。

実は、その認識論的な適否は命題価値＝妥当に則しており、適合はあくまで客観から主観を向いている。すなわち19世紀の哲学者ロッツェにしたがい、妥当を判断の則るべき認識の対象とする。リッカートは例えば「雪は白い」という判断を促す、〈雪ハ白イハ真デアル〉のような妥当が、判断基準として主観に顕われると考えた。それゆえ判断行為という〈装い〉は実践的であるが、その認識論は現象学に接近する。

このさい注意すべきは、認識に係る論理的［= logisch］事実判断が、実践に係る倫理的［= ethisch］価値判断をお手本に論じられることである。こうした命題価値を前提にした事実判断と、事実判断と一応区別される価値判断とが類似した構造で考えられている。両者をひっくるめた広義の価値判断は、⑴命題価値に対する⑵「態度＝振る舞い」という構造をとる。⑴を強調すれば、――「かかわり」を以て働きかける妥当を、命題価値として据える――非自然主義的認知主義ということになり、⑵を強調すれば、情緒主義的決断主義ということになる。このさい⑵「命題 p に賛成態度を取る」を、⑴「命題 p は価値として妥当する」と等価と見なして、⑴と⑵を架橋できる。こうして価値哲学は、⑴命題モデルと⑵自由モデル、つまり認知モデルと実践モデルとでも言うべきものを止揚している。判断を決

断に任せることなく、命題価値＝妥当からの「かかわり」を受け止めている。このさい命題価値は或る種の実在と言えよう。したがって、以下で見るラスク哲学のように、非認知（決断）主義を克服した**認知主義**をかたちづくる。

狭義の事実判断（構造としては価値判断）にわたる、いくつかの論点を見ておかねばならない。ラスクによれば実践的価値判断とはちがって、事実判断の場合の客観的妥当と主観的意味の一致[2]は、――俗に言われる、――実践的「振る舞い」とは、無関係だからである（Primat S.350.）。ラスクはリッカート批判[3]で言う、主観的意味〔リッカートの内在的意味にあたるもの〕は、客観的妥当から出てくる唯一の要素であり、超主観的価値の〈鏡像〉形象である（Primat S.351.）、と。意味はあくまで非現実的意味形象であって、「振る舞い」（例えば Urteil と区別された Urteilen）のごとき心理的存在ではない（Primat S.351.）。それは客観的価値によって承認に値するもの、と見なされる（Primat S.352.）。認識作用には、感情的適合や意志的適合等が認められることがあっても、それらとは別種のものとして、〔一種類の〕意味要素が区別されるだろう（Primat S.352.）。意味要素は、当為や要求のかたちに言い換えられるものではなく（前期ラスクは、法哲学で哲学の対象を当為としていた）、「振る舞い」のなかで体験されるものであり、純粋妥当に合致する（Primat S.354.）。ただし理論的でない倫理的意欲、つまり可能的に義務の対象となるものに対して、理論的な主観的意味は無関係である（Primat S.356.）。

リッカートは、思惟自体の同一性を基軸に思考をめぐらし、フレーゲ（Ch. Krijnen 2013, S.45.）とともに、同一説[4]〔、もしくは余剰説〕に近いスタン

2　ラスクの原文では、「対応」である。根本的な「改釈」かもしれないが、フレーゲ的観点から修正を施しておく。

3　1905年のラスクのヘーゲル論にさきがけが見られる。妥当は当為に一致しないという論点（E. Lask 1923（←1905）, S.339.）。

4　リッカートでは、妥当とは、一致を名乗る思惟そのものの次元であり、この価値自身において真理が問われた。それをスピノザ風に言い換えれば、〈おのれと同一な観念〉の次元と言えるだろう。スピノザによれば、真なる思考は、ほかの思考に関

スをとったと言えよう。そうしたラインの真理論を一瞥しよう。〔ここで識者なら、ラスクの対象と意味の同一性を想起されるかもしれない。〕フレーゲ的に言うのなら、「思想」は意味［= Sinn］というかたちで事実と合致する［= coincide］。すなわち真である意味的項は、事実そのものと融即すると考えられる。実際リッカートは、以下のように説いていた。「一致を認識するには、相変わらず主観が必要であり、そうした認識はもはや表象ではありえぬ。なぜなら表象なら、新たな一致が認識されねばならず、無限後退に逢着せざるをえまい」（H. Rickert 2018, B.44.）。模写は――必然的に現物とコピーの対応にもち込まれる以上、――無効なのである。というのもいわゆる客観項は、知覚される本来の客観と、表象によって模写された客観という、二項に分裂しかねないからである。こうして認識主観のなかに、主観列の無限系列を抱え込んでしまうことを、彼は批判したのである。一致はあくまで外面的な基準であって、真であると本当に言えるためには、思惟そのもののうちにその根拠をもつ、と説いているように見える。ゆえに思惟そのもののうちから、リアルな命題価値＝妥当が、現実性という相在を組み立てる。しかもこのように考えられた妥当によって、間違いが有意化され〔認識が誤りかもしれないという〕真理の反省〔＝射〕性が保証される。こうした論理的妥当に対する直観的で受動的な作用を、ラスクならHingabeと呼ぶだろう。この主客の相関は、ラスク的に言えば、〈傾倒〉、すなわち渇仰しつつ、受け入れることでなされるが、これを非可感的なものへの帰依、もしくはsurrender（奉戴）とも表現できる。こうしていみじくもS・ベゾーリが「本質的に直覚的な眺めやり」（S. Besoli 2002, p.302.）と言うように、ラスク、さらに彼から影響を受けたリッカート価値哲学は、先に触れた現象学的直観（以下ではその〈作用〉を「受け入れ」と呼ぶ）へと近づいてゆく[5]。

係なく、それ自身で自らが真であることを知悉しているのである。ということは思考の対象は、現実性の概念と等価となろう。真理の同一説についての解説は以下のHP参照。https://plato.stanford.edu/entries/truth-identity/2020年５月11日閲覧。

5　E. Lask 1924（←Nachlass）, S.156. 認識とは、「超越的意味に内在化という痕跡を呈示

(2) 認知主義と非認知主義の間

・ヌスバウムの認知主義

リッカートでは判断一般は、論理的妥当・倫理的妥当という命題価値を対象にもち、その種差から存在判断と価値判断のちがいが考えられたが、そのうちでも倫理的妥当に注目しよう。「すべての学問、したがって倫理学もまた、妥当的判断内容をもつべきである。....〔事実がかかる存在判断ではなくて〕いわゆる価値判断になると、妥当内容がはたしてなおもどれだけ、理論的妥当と関係をもつのか注意する必要がある」(H. Rickert 1914, S.183.)。「そこで倫理学が混同を回避しうるのは、論理的価値及び倫理的価値の概念を、倫理的妥当のもつ論理的妥当に対する関係に鑑みて規定する場合に限定されている」(H. Rickert 1914, S.184.)。価値判断の実践的効力を倫理的妥当は具えている。ところで実践的効力ということで言えば、たんなる情動もそれをもつだろう。実際、現代の哲学者ヌスバウムは、情動と価値判断のあいだに垣根を設けていない。

ベン−ゼヴの情動論入門書の紹介に拠ろう。ヌスバウムは「価値ないし重要性にかんする判断としての情動」(2004 ref. 1 intro, p.7.) の議論を、「母の死に直面した感情の説明の揺れ」から始めている。「自分自身の生にとって重要にちがいない」情動の対象は、「判断」から構成されると考える (1 intro p.7.)。そして彼女は情動の特徴を五つ挙げている。

「1. 情動は何かについて主題にしていること。それは対象をもつこと。

2. 対象は志向的対象であること。すなわち、情動をもつ個人によって認められる [= see] か解釈されるとき、志向的対象は情動に顕われる。

3. この情動は、単に対象を認めるという単純な仕方で具現されるのではなく、対象に関する――それも時にはきわめて複雑な――信念のかたちで具現される。

し、受け入れる (empfangende) 主観性たらんとすること」である。すなわち直観による見分け、意味を体験によって受け取ることを「認識」と言う。

４．情動はすべて価値と関係していること。情動はその対象について、個人的重要性を負荷して認める。情動は行為主体の栄えにかかわる点で、幸福主義的である。

５．情動は知覚であるのみならず、価値判断であること。それはものごとの現われ［= appear］方に対してスタンスをとる」（下線イタリック。１intro pp.7-8.）。

新カント学派〔西南ドイツ学派〕とヌスバウムの距離は、一見近いようにも見える。だがしかし、リッカートは理性的な価値判断を、こと実践的な評価――けだしそれが情動、すなわち「引用符つきの価値判断」[6]にあたる――と区別していた。その見地とは相違して、ヌスバウムは、評価にあたる情動を価値判断に引きつけ、情動と価値判断を等置したと言える。また知覚のなかに価値判断を見出しているのも、新カント学派的ではない。彼女の「情動が判断の形式をとる」という考えは、古くは「古代ギリシアのストア主義説のヴァージョン」と親近性をもつ。ストア・ヴァージョンでの情動とは、「ままならぬ事物や個人に大きな重要性を帰属させ

6　「引用符つきの価値判断」と呼ぶものは、主観的に普遍化されていない。つまり畢竟情動であり、ドクサにとどまる。――高次認知的情動は、身体的反応のみによって決まるわけではない。親の死に目に愛情を感じない、むしろ疎遠さという情動を感じていたとして――世間体から悲しむそぶりをしていたのにすぎないとせよ。にもかかわらず、実際悲しんでいるように、涙も心拍数の変化も生じたとしよう。その場合、悲しみの感じ・行動が伴うことがあろう。にもかかわらず、当人は疎遠さしか感じていないのだから、悲しむべき理由を見出せない。それは「自己演技的悲しみ」と言うべきである。情動を感じるにさいして、「愛していない」のだから、「自己演技的悲しみ」は、愛の顕われとはならない。「悲しみの感じ」と「悲しくないという認知」とは同格でなく、身体的反応（涙や心拍数の変化）を考えに入れても、「愛していないから悲しくない」という本当の価値判断は探知できないのである。例えば飛行機に乗ることに恐怖を抱く人は、たとえ飛行機は安全だと思うようになっても、やはりしばしば恐怖を抱き続ける（信原2014、８頁.）。このことはミュラー・リヤー図形の長さが同じだと教えられても、なお片方が長く見えることになぞらえられるかもしれない。しかし長さの見えがいかに安定していようと（モジュール性）、長さの判断は見えに拠るのではなく、定規を使って反省的に補正した結果を採用すべきである。それに模すなら、モジュール化した情動は、それだけでは価値判断に上昇しえぬことを示唆している。価値判断においてはじめて誤りを語れること、裏返せば情動には勝義の誤りがないことは、暗に価値判断と世界が連動していることを示している。

る評価的判断の形式」をとるのである（EVI p.79.）。しかし、情動＝評価［= Wertung］と価値判断［= Beurteilung / Bewertung］の、それぞれが有する行為者相関性／中立性は、趣を異にしているのではなかろうか。例えば以下の行文は、反省という観点から見て、情動と価値判断のちがいを際立たせているように見える。

「情動のストア的見解にはライヴァルセオリーがある。すなわち、情動は、単に個人を急かして、意識的な知覚とは関係をもたない無思慮なエネルギーの、「非推論的動き」とする見解である」（EVI p.80.）。そのライヴァルセオリーには、「情動は、「精神的」というよりむしろ「身体的」で、あたかも、情動を知性的よりむしろ非知性的にするだけで十分であるかのごとき考えと、結びついている」（EVI p.80.）。「これらの情動は単に対象を認める仕方で具現する［= embody］のみならず、対象についての、――それも時にはきわめて複雑な――信念のかたちで具現する。すでに記したxをyとして認める例を、xがyであるという信念から区別するのは、必ずしも容易でないが、そうするのは望ましいとすら言える」（EVI p.82.）。

彼女はこのように述べ、単純な認定［= seeing］、ナマの情動に対して、反省的な信念という〔判断の〕次元を区別するのである。さしあたり彼女が、価値判断の基盤に認知的な契機を認めていることに賛同したい。さらに、この反省的な情動の行為者相関性にわたる論点を、プリンツに即して検討しよう。

・プリンツの非認知主義

私たちの、思考・判断としての認知を担う脳の部位と、情動を担う脳の部位は異なる。もしそうなら、情動のなかに、或る種の利害関係的「評価」が含まれているとしても、高度な概念思考的認知能力を使ったものでないとして、プリンツは論を展開する。

情動が本来表わす＝表象するものは、外的状況と私たち自身の〔利害〕関係、つまり中核的関係主題である（J. J. Prinz 2004, p.68.）。情動はほとんどの場合、実際には認知的ではない（J. J. Prinz 2004, p.50.）し、概念的

でもない。ただし私たちは概念化されたヴァージョンの情動をもつことはあるし、それを認知作用において用いることもできる。主体とそれをとりまく状況の関係を、主体の利害という観点から表象することのなかに、評価はふつう暗黙裡に含まれている。とは言っても、高度な概念操作を使ってなされるような純粋認知理論的な〈認知〉を考えているのではない（J. J. Prinz 2004, p.50.）。情動は身体反応をレジスターする（因果的に記録する）[7]が、表象していない。身体反応を表わすことを本来の機能としていないのである。

まとめれば、次のようになる。プリンツは言う。「情動の非認知理論に与するものであるが、それは情緒主義と妥協しうる」（ECM p.50.）、と。肝要なのは、「情緒主義者は非認知理論に賛成すべき〔点〕である」（ECM p.55.）ということである。そのポイントは、情動の身体性〔に関する点〕（ECM 2.1.3）にある。とすると、ただちに合理性査定問題と身体的類同性問題に直面する。非認知主義的情緒主義は、前者、――つまり情動は合理的な言葉を使って語られることがあるにもかかわらず、非合理的になりうるのでは、という問いに対し、プリンツは情動が非合理的であってもよいし、身体的な変化を伴うと答える（ECM 2.1.4.）。志向性の観点から言えば、「結局、ドレツキによって独立の動機をもった表象理論は、悲しみが表象するものは何かという問いに、きわめておあつらえ向きの答えを提供する。悲しみが喪失を表象する論点に限れば、ドレツキ理論の埒外に出てしまうが」（ECM p.62.）。すなわち中核的関係主題を表象するといっても、喪失という抽象的な概念的内容を表象しているのではない。「こうした帰結にとって重要なことがらは、ドレツキ理論は、表象の形式・フォーマットに関するいかなる仮定にも依拠していない点である。....ドレツキ理論は高度に概念化した表象に適用されるばかりではなく、痛み、感覚心像、しかも

7　XとYの間には法則的なつながりがあり、Xは「Yが生じた」という情報を担っている。つまりXはYを表わす（ただし、Xは「Yが生じた」という情報を担うためにあるのではない）。このときXはYをレジスターすると言う。

免疫システムの抗体にさえ適用されうる。たとえ情動が身体的変化を規制しレジスターする状態であると同定されたとしても、その理論は情動に適用しうるものなのである」(ECM p.62.)。このように身体変化が内容をもたないとしつつ、プリンツは〈状態への志向性〉を受け入れる。

また身体反応について、対応する身体性の反応は似ているが、較正をつうじて、類同的な［= similar］身体的反応をちがう情念に選り分けていくのだと、プリンツは応対する（ECM 2.1.5.)。「私は、ジェームズ＝ランゲによる身体的アプローチのもとで打ち立てられた情動理論を発展させてきた。....身体化評価理論は.....〔立ちふさがる〕問題を解決できるようになった。情動は認知的状態ではない。しかしこの理論は重要な側面で、ジェームズ＝ランゲ理論から離れる。すなわち情動は内容を表象するのである。このことは、情動というものが正当な根拠を与えられていないものでも、いるものでもありうるし、二つの情動が身体的には区別がつかないものにもかかわらず、異なる内容をもちうることを許容する。.....」(ECM p.68.)。こうしてプリンツは、内容的には認知と似通うものの、情動は外的状況の私たち自身の利害関係を表象とするとして、純粋な認知主義を離れる。

こうした情動論に依拠しながら、プリンツはとくに倫理理論としては、感受性理論[8]を採用する（ECM p.87.)。ポイントは二点ある。①行為は、道徳的観察者が、或る条件で是認（否認）の感情［= sentiment］を惹起する場合に限って、道徳的正（邪）の性質をもつ。②情動［= emotion］を感じる傾向は、通常の正（邪）の所有にとって条件となる。

感受性理論とは、道徳的性質を主観的なものとして、感受するという説

8　倫理的な善し悪しは、感情的反応から独立に理解できない。道徳判断の誤謬可能性は、以下のような生理的情緒反応の経路を取る。「たとえば、わたしはこれまで「裏切り」という行為のタイプに対して否定的な感情の指針を抱いてきたとしよう。しかし、ときにはある具体的な行為が（感情のスペクトルと合致し）誤って「裏切り」タイプの事例とみなされ、結果として否定的な情動が喚起されてしまうかもしれない。この誤謬可能性は、特定の行為のタイプに対する情動の傾向性が長期的かつ安定的に記憶され、一つの「指針」として安定しているから確保されている」(永守2016、211-212頁.)。

である。感受性とは、道徳的価値をかたちづくる情動を非推論的に教えるから、それによって価値の直観的性格を説明できる（ECM p.88.）。そのさい世界の側に〔二次的性質になぞらえた〕道徳的性質が位置づけられ、それは情動的に表象される（ECM p.89. したがって、ブラックバーン的な準実在論に帰着する）。

この行為の道徳的性質の把握は、一面から見れば認知的である[9]。例えば、たしかに〈すり〉を盗みとカテゴライズする役割を知覚は果たしている。これにより記憶を由来とする規則が興発されて、感情が「活性化」する。道徳的性質が感情と関心によって跡づけられる（ECM p.101.）というわけである。その性質カテゴリーは、評価的態度を表現するとともに、クラス分けする役割をもつ（ECM p.101.）。このように準実在論的な（ECM pp.107–8.）感受性理論は、メタ倫理学的には自然主義と見なされるかもしれない。

しかし、これは事の半面である。こうした過程は、半ば生得的なメカニズム（ただし後天的な記憶も働く）によって因果的に惹き起こされる。長期記憶媒介的な感情は、短期的な情動を文脈感応的に引き出し（ECM p.104.）、その情動は行為の知覚と結合する。この身体的経路に注目して、プリンツは、正邪はソマティック・マーカーと機能していると表現する（ECM p.102.）。結局、その倫理学説は情緒主義に位置づけるのが正当であろう。道徳的態度は典型的には、熟慮を経た推論なしに起こるのであり（ECM p.98.）、情動は倫理的な判断の構成要素なのである（ECM p.99.）。もちろん情動的反応はたんに因果的ではなく（ECM p.114.）、メタ情動によって規制されることもある（ECM p.115.）。また情感［= affect］とは離れて、命題表現が情緒的態度を伴うことはあろう（ECM p.99.）。だがしかし情動の実質が価値判断にとって必須であり、たとえ命題表現といえども、情動の約めた表現と見なされる（ECM p.100.）。要するに感受性理論

9　永守 2016、209頁、プリンツの倫理理論を認知主義とする解釈には、後述のように首肯できない。永守 注（6）も併せて参照のこと。

は主観主義的（ECM p.118.）であり、〔例えば〕悪いから否認されるのだが、それとともに否認されるから悪いという言い方も、許容するのである（ECM p.118.）。とはいうものの倫理理論を、こうして各私的な情動に還元するのは、いかがなものか。

もちろん筆者は、情動と価値判断との関係を否定するものではない。情動の機能として身体反応を興し、適切な行為を生み出すことがある。例えばイヌに噛まれたくない、と恐怖の情動を覚えるとき、身体が震えるとともに冷や汗を伴う。例えば運動会の「応援」において興奮するさい、その身体的反応は、恐怖の場合とちがっている。異なる情動には異なる身体的反応が対応する、というわけである。信原の言葉で言えば、「身体的反応はそれぞれに対応する価値的性質を表わしていると言える. . . .」（信原2017、10-12頁．　Cf. J. J. Prinz 2004, pp.69-72.）。

しかしそのままでは、情動はまだ行為主体中立的なものに鍛え直されていない。すなわち、情動の実質に焦点を結んだ、非認知主義的理解も価値判断にふさわしいものではない。「あの人は気持ち悪い」は行為主体相関的な情動だが、「あの人は穢らわしい」は行為主体中立的な価値判断である。同様に「檻の中にいる犬がこわい」が情動（「引用符つきの価値判断」）なら、「檻の中にいる犬は危険でない」という脱人称化された〔行為主体に言及しない〕メタ的判断が、それをしのぐ。つまり「檻の中にいる犬は危険でない」こそが価値判断であって、「檻の中にいる犬がこわい」は情動を命題形式に落とし込んだものにすぎない。

・新カント学派の認知主義

こうして情動たる「引用符つきの価値判断」は評価［= Wertung］にすぎず、新カント学派的な価値判断から区別される。以下のようにヌスバウムが怒りを規定するとき、彼女はそうした価値判断に接近している。「....怒りを抱くためには、より複雑な信念の集合をもっていなくてはならない。いくらかのダメージが自分にあるか、自分に近しい事物・人に対するダメージがあったかと信じ、それが些末な〔意義をもった〕ものではなく重大なも

のであり、誰か他人によってなされ、その行為は積極的で、ダメージの加害者には、罰が与えられるのが正当のように信じられていなくてはならない。納得のゆく仮定としては、信念のこの集合の要素がおのおの、怒りが現に存するためには必要とされよう。万が一、xではなくyがダメージをもたらしたとか、その行為が積極的でないとか、深刻なものでないとかの場合は、自分の怒りはそれゆえ修正され、減退しうるであろう」（EVI p.82.）。

「引用符つきの価値判断」は、価値判断とは別領域に属すものなのである。しかも情動を反省してかたちづくられる価値判断は、〈認知的信念〉である以上、身体性を棚上げにできるのではないだろうか。〔またこれとは別途、理論的合理性に係るものとして、述定により、動機を伴わぬ主観的に普遍的な価値判断（趣味判断）が確立されるという余地を残したい＝理論的価値判断。信原 2016、283-284頁.〕反自然主義的な理性的省察による価値判断に対して、情動は言わば「ドクサ」となる。とすれば理性的価値判断の見地によって、新カント学派的**認知主義**の橋頭堡を獲得したことになる。とくに（非認知主義を敬遠し）認知主義を取るヌスバウムにならい、「理性がここで、〔心の〕動きとなり、抱懐し、拒絶するのである。それは迅速にせよ緩慢にせよ、また確然としてにせよ、躊躇いがちであるにせよ、〔理性は心の〕動きとなる」（EVI p.87.）という理性的価値論を、新カント学派的なそれに引きつけたい。このようにすれば現代のカント主義者の認知主義を、そう遠くないところに位置づけられるはずである。

カント主義者、G・シェーンリッヒから引用する。「賛成態度の概念は、情動的賛成態度・意欲に関わる賛成態度・日常的知識に関する賛成態度からx〔引用者補足：xは価値として想定されているもの〕の促進や維持を目指すというような特定の行為意図までの範囲全体を蔽うものとして理解されなければならない。認知的な基礎を持（ママ）たない空腹といった衝動や本能・痛みの感情はこの概念には含まれない。つまり、区別の基準は認知的基礎である。不安という気分や嫌悪といった情動、そしてもちろん尊敬のような感情は、弱くても示されはする認知的基礎を持（ママ）っている。一方、こうし

た認知的基礎は、欲望や選好といった意欲に関わる態度において、ましてや信念や行為の意図においてははっきりと打ち出されている」（G・シェーンリッヒ 2017、48頁.）。つまり端的に言って、価値判断は世界と連動している。想像されただけの情動や、誤っているかのような「情動」は、価値判断に値しないのである[10]。

(3) シミュレーションと再較正

ここでリッカートに戻れば、認識のア・プリオリは命題価値である。妥当からの「かかわり」を再解釈（再解釈ということで、たんなる読み替えでなく、価値的な変更を伴うとしたい）することで、認知と情動の種差が生まれてくる。そうして認知的経路を経て、勝義の価値判断が立ち上がる。臆断をおそれずに述べるなら、①行為主体中立性ということと②「再較正」という解釈（一応、非因果的プロセスを許容する）が、認知主義的・合理主義的な価値判断の機軸となっている。ここでの行為主体中立性とは、妥当が対峙する「意識一般」（行為主体への非言及）に依拠することである。それは、応対者に言及しないという事態であり、それを形式的に言い直せば、対象OについてOが中立的に善であるのは、Oに適合的に賛成するのが、それに寄与する性質が、Oに賛成することに適合した応対者への言及なしに記述される場合、かつそのときに限る（G. Cullity 2015, p.105.）ことである。「意識一般」を論じる文献は、汗牛充棟の趣があるが、さしずめこの態度表明で済ませておくことにする。このように価値判断は行為主体に言及することなく、世界に係留されている。しかし新カント学派の場合、認知の根拠として内在的表象が媒介している。そこで単純に「受け入れ」るのではなく、実践的解釈が介入しうる。

10　G・シェーンリッヒは、ストアの自己配慮概念を自惚れに陥ることを防圧しつつ、私にとっての価値の客観的妥当性を要求する。そのさいシェーンリッヒはFAアプローチに依拠しているが、その自己愛をめぐる考察は、カント哲学を基礎にしながら幸福論にわたる広袤をもっている。Vgl. G. Schönrich 2015.

ここで進化論的見地との接合を図ろう。進化論的には、〈環境による受動的選択：ダーウィン型生物〉→〈試行錯誤と学習：スキナー型生物〉→〈思考実験・シミュレーションによる対応：ポパー型生物〉というかたちで、信念的な認知が分節化してゆくであろう。そもそも「環境の表象」と「自分の多数の選択肢の表象」とを内在的領域に形成しつつ、シミュレーションを行うところに、進化を経たポパー型生物の特徴があった。新カント学派的に言えば、内在的領域において、実践を予期したシミュレーションが環世界的な実践的価値判断を促すのである。つまり認知をベースにしたシミュレーションが、価値的反応を規定するであろう（「ポパー的生物」に重なる論点）。こうして先の非自然主義的認知主義と情緒的決断主義とのバイメタルに即して、内在的シミュレーションを把握し直してゆく（シミュレート感応説と名づけておこう）。このさい命題価値に対応して、内在的領域に実践的反応の仕組みを組み立てる――言わばモデルを作ることをシミュレーションと理解しよう。つまり解釈とは、自分が説明や予測の対象と同じ心の状況にあったら、どうするかを想像するシミュレーションである。このように仮想的な欲求・信念を、実践的推論の前提として想定するということは、説明や予測の実践的有効性を試金石にすることに他ならない。すなわち認知と実践は手をつなぎ、信念と情動は出逢うものと見なせよう。〔主体が解釈可能であるためには、必然的に誤りの認識能力をもたねばならず、可能的事態を想定しなくてはならないから、この意味でもシミュレーションは必須である。金杉 2014、82-86頁.〕さらに認知主義の懐に入り込むなら、信念的な認知の実践的な対応機制として、較正に注目できる。

情動が各々の文脈で認知的特色をもつという「（再）較正」[11]（= recalibration、

11　F. Dretske 1986, pp.22-24.「指定［= assigned］機能により意味するもの、はたまた私たちが（意図、目的、信念によって）指定機能を具えたシステムでの関係のあり方を理解するには、以下のケースを考察せよ。1グラムの端数に較正された、僅少な対象の重さを決めるための使用が意図された、敏感なバネばかりがある」。それが1gを0.98gと測ったとしても、それは引力の差であり、標高の指標をレジスターし

F. Dretske 1986 / J. J. Prinz 2004）を経由して、情動は体系的判断に接続することを描こう。そして事実判断的認知と価値判断的評価の区別にわたる論点を拾う。――そもそも較正とは、或る「探知器」に反応する情動について、「或る探知器で測ったらAだったのに別な探知器ではBになる」という一見した不一致を避けるよう、共通の基盤を探し、それぞれの探知器の追跡を把握することである。例えばネズミは過去の状況によって、餌を得るよう〔因果的に〕条件づけられているが、そのために餌の場所まで泳ぐというようには、条件づけられていないとする。泳ぐさいには、例えば「餌を得よう」とする情動が、「泳ぎ」を促す情動へと修正をこうむる。例えば通常の身体性の「怒り」は、或る認知的判断の状況下では、「不貞」に関する判断への反応として生じた「嫉妬」となる。例えば通常の身体性の「快感」は、反省を潜り抜けることによって、「幸福感」として、さらに「再較正」／再解釈される。このように別の認知的条件のもとでは、別の情動的認知を構成する。

とすれば、命題価値をベースにして、事実判断・価値判断の分岐を説くことができる。両者の違いは、「金が100gある」という命題価値の認知が、ふつうは重量のカテゴリーのもとでなされるものの、ときとして、「この金は65万円である」と解釈し直されることで生じる。認知的所与を較正して、価値的機能を担わせることができる。論理的には後者が解釈し直されて、前者が成立するという見方も可能である（し、むしろ新カント学派的には、その方が自然である）。認知的要素が「一義的に」扱われるわけではなく、（例えば価値的にも）再解釈される。認知的状況は――それが重畳した場合――「再較正」によって、情動的な評価的なものに変換されるし、それを基底にして価値判断を反省的に（行為主体非言及的に）構成してゆくこともできるだろう。「かかわり」で与えられた命題価値＝妥当が、

ているのである。「私たちは、計器の指定機能を変えることがときとしてある。較正するさい、例えばそれが普通使用するさい測るものを、測定するためには使用しない」。認知的状況によって指定機能が変われば、測定された指定結果の意味も「再較正」され、変化しうるのである。ref. J. J. Prinz 2004, p.99.

事実判断にとっても価値判断にとっても、実在論的基礎になる。

この「再較正」（以下、高次の較正ということで「再較正」という表現に統一する）という論件を、言語的に反省してみると、ア・プリオリは命題価値に由来するとはいえ、世界ならざる言語の要素を変換する機能を果たしている。言わば、単純に客観に帰依するのではなく、主観的な反省〔＝射〕がここに介入しうる。〔ラスクに言わせれば、妥当者をこうして主観に依繋せしめたうえで、客観側に移すことは、一種の「迂路」でしかないと批判されるが、こうした「迂路」は必然的である[12]。〕

この「再較正」の言語的機能とは、解釈中立的な表象ということではなく、主観の側から客観の「受け入れ」を解釈し直すということである。ここでいみじくもプリンツが、道徳感情の成立に長期的記憶が必要としていたことが思い出される。すなわちその「再較正」にあっても、記憶媒介的な言語的知識に触れ、ア･プリオリを規範的なものとして受けとるとした。もし客観を「受け入れ」るだけならば、他律ということになってしまうだろう。他律の場合なら、「したがうべき善い行為」が決まってくるし、（理性の検討を経ずに）そのまま実践すべしと要求される。しかしながら再解釈ということを必須と見なした場合、「さしあたり何が善い行為かはまったく決まっていない。われわれはみずから問うことによって、それを（定言命法を武器に）見いださねばならない」（中島 2005、142頁. 下線は原文強調）と言えまいか 。カント的に言えば、当為を構成しつつ、定立されたそれを「受け入れ」るのだから、善い行為は必ずしも素のまま、決まっていない。個々のケースに応じて熟慮された述定的判断を手掛かりにしつつ、自律的に卓越した価値判断を作り出し／「受け入れ」てゆく。要するに帰結の意味を変更し、本来の機能でないもののために〔標準的に記述される〕帰結を応用できる。裏返して言えば、このことは、確定領域の「道

12　倫理性とは、自我の内部に存立する「直接的な関係性を批判する客観性」（見田宗介1984、77頁以下. 下線強調見田。）である、という見田宗介的〈賢治像〉に共感すると言い切っておく。倫理の〈彼方からの声〉については、「業の花びら」（宮沢賢治 1924）を見よ。

徳判断」を未確定の「道徳判断」と連続で考えるということである。

例えば伊勢田哲治が、未確定領域の〔功利主義的〕「道徳判断」について、以下のように語ることに耳を傾けよう。「新しい技術によって引き起こされる新しいジレンマ（これは応用倫理学の定番のテーマであるが）は現存する道徳的規則ではカバーされない状況を作り出しうる。その結果、「未確定領域」、すなわち現存する規則にしたがうだけでは解決できない状況や問題の領域が生じる」（伊勢田 2012、99頁.）。そもそも、批判的思考のなかでの、新しい直観的規則の創造と、規則の相克の処理に関連して、功利主義は前者に関してほとんど無効であると言う（伊勢田 2012、98頁.）。伊勢田によれば、新しい直観的規則を創造する任務を功利主義は放棄すべきであるとされる。功利主義への批判が規則を創造できない点に鑑みれば、一見自明の原則を選ぶ場合、功利主義的思考に訴えなければよいからである。とするなら、非帰結主義には、そのエアポケットを埋める可能性を期待できる。翻って倫理的な判断は、根本的に文脈に依存する（共範疇性については別の機会に論じる予定である）以上、「現存する規則にしたがうだけでは解決できない」から、その都度、「みずから」問うて、答えを「見出さねばならない」。ゆえに、この解釈行為において、実践性は部分的に面目を施す。それに依拠した認知は、再解釈という実践と一体になっているのである。筆者なりに言い換えれば、機会集合の変化に伴う文脈の変更によって、倫理的な、とくにその価値判断は新たに解釈されざるをえない。それを規範的に統制する合理性のためには、須らく主体は内在的領域に信念をもつべきものと、見なさなくてはならないのである。

まとめれば、基本的に価値判断の適合の向きを、客観（＝命題価値）から主観と見なすことで、リッカート哲学を認知主義として捉える途を追求した。そして現代の情動理論を批判するかたちで、情動という下層に対し、行為主体中立的な価値判断という上層を設定した。そのさい上層には再較正、つまり再解釈の実践的契機を見出した。ゆえに適合の向きはなお客観から主観とはいえ、再解釈の実践に主観の側の派生的作用を認めうる。こ

うしたかたちで、認知主義は実践を止揚することを論じたのである。

追記：本論文は、JSPS科研費20K00119の助成を受けたものである。

文献

Ben-Ze'ev, Aaron: "Introduction", in; eds. by Aaron Ben-Ze'ev and Angelika, Krebs, *Philosophy of Emotion. Vol. I, The Nature of Emotions*, London/New York: Routledge, 2018, pp.1–18.→略号：1 intro.

Besoli, Stefano: *Esistenza, verità e giudizio. Percorsi di critica e fenomenologia della conoscenza*, in; *Quodlibet*, Macerata, 2002.

Cullity, Garrett: "Neutral and Relative Value", in; eds. by Iwao Hirose and Jonas Olson, *The Oxford Handbook of Value Theory*, Oxford: Oxford University Press, 2015, pp.96–116.

Dretske, Fred: "Misrepresentation", in: Radu J. Bogdan, *Belief: Form, content and function*, Oxford: Oxford University Press, 1986, pp.17–36.

Fichte, Johann Gottlieb: *Das System der Sittenlehre*, in; hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Gliwitzky unter Mitwirkung von Hans Michael Baumgartner, Erich Fuchs, Kurt Hiller und Peter K. Schneider, *Fichte Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Werke 1798–1799*, Stuttgart-Bad Cannstatt: F. Frommann, 1977（←1798–1799）, Bd. 5.

Heinz, Marion: "Die Fichte-Rezeption in der Südwestdeutschen Schule des Neu-kantanismus, in; hrsg. von Wolfgang H. Schrader, *Fichte im 20. Jahrhundert. 200 Jahre Wissenschaftslehre—Die Philosophie Johann Gottlieb Fichtes*, 1995, S. 109–129.

伊勢田哲治：『倫理学的に考える』勁草書房、2012.

金杉武司：『解釈主義の心の哲学　合理性の観点から』勁草書房、2014.

Krijnen, Christian: "Vom Abbild zum Begriff, Wahrheit als Überstimmung des Denkens mit sich", in; hrsg. von Tomasz Kubalica, *Bild, Abbild und Wahrheit: von der Gegenwart des Neukantianismus, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2013, Bd. 30, S. 41–58.

九鬼一人：「リッカートの〈しなやかな合理性〉—新カント学派と人間の総体性—」、『理想』第703号、2019、48–57頁.

Lask, Emil: *Hegel in seinem Verhältnis zur Weltanschauung der Aufklärung*, in; hrsg. von Eugen Herrigel, *Emil Lask: Gesammelte Schriften*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1923（←1905）, Bd. I, S.333–345.

Lask, Emil: "Gibt es einen 'Primat der praktischen Vernunft' in der Logik?", in; hrsg. von Eugen Herrigel, *Emil Lask: Gesammelte Schriften*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1923（←1908）, Bd. I, S.347–356.→略号：Primat.

Lask, Emil: *Zum System der Logik*, in; hrsg. von Eugen Herrigel, *Emil Lask: Gesammelte Schriften*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1924（←Nachlass）, Bd. III, S. 57–170.

見田宗介：『宮沢賢治—存在の祭りの中へ』岩波書店、1984.

中島義道：『悪について』岩波新書、2005.

永守伸年：「感情主義と理性主義」、太田紘史編『モラル・サイコロジー』春秋社、2016、187–218頁.

信原幸弘：「よみがえる情動の哲学」、信原幸弘・太田紘史編『シリーズ 新・心の哲学 Ⅲ　情動篇』勁草書房、2014、1–28頁.

信原幸弘：「道徳判断と動機」、太田紘史編『モラル・サイコロジー』春秋社、2016、

271-315頁.
信原幸弘：『情動の哲学入門　価値・道徳・生きる意味』勁草書房、2017.
Nussbaum, Martha: “Emotions as Judgements of Value and Importance”, in; eds. by Aaron Ben-Ze'ev and Angelika Krebs, *Philosophy of Emotion. Vol. I. The Nature of Emotions*, London/ New York: Routledge, 2018（←2004）, pp.77-92. →略号：EVI.
Prinz, Jesse J.: *Gut Reactions, A Perceptual Theory of Emotion*, New York: Oxford University Press, 2004,
Prinz, Jesse J.: *The Emotional Construction of Morals,* Oxford: Oxford University Press. 2007.→略号：ECM.
Rickert, Heinrich: ”Über logische und ethische Geltung”, in; *Kant-Studien*, 1914, Bd. IX. S.131-166.
Rickert, Heinrich: *System der Philosophie, Erster Teil*：*Allgemeine Grundlegung der Philosophie*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1921.
Rickert, Heinrich: *Heinrich Rickert: Sämtliche Werke, Der Gegenstand der Erkenntnis, 1.-2. Aufl.*, hrsg. von Rainer. A. Bast, Berlin/ Boston: de Gruyter, Bd.2/1, 2018.
Schönrich, Gerhard: “Würde, Wert und rationale Selbstliebe”, in; *Zeitschrift für philosophische Forschung*, 2015, Bd.69, Heft2, S.127-158.
シェーンリッヒ、ゲアハルト著／高畑祐人訳：「哲学的価値理論のオプション」、加藤泰史編『尊厳概念のダイナミズム　哲学・応用倫理学論集』法政大学出版局、2017、21-64頁.